

自殺について②

コロナ禍の4、5月、自殺者数は前年同期比で、約20%の減少となりました。

報道では、「会社に行かず、ストレスがたまらなかったから」「家族がそばにいたから」などのコメントがありました。

これは本当でしょうか？

東日本大震災の後も同じ傾向でした。震災翌年、被災県の自殺は大幅に減少しました。しかし、2年目から4年目は横ばいか上昇しています。

よく使われる論理ですが、震災後は「ハネムーン期」といい、「みんな大変なのだから一緒に頑張ろう」という気持ちで、被災者や地域、国等が一致団結します。マスメディアも「奇跡の生還」など、視聴者・読者の琴線に触れる報道をします。

さらにこの理論を強化するのが「新自殺論 自己イメージから自殺を読み解く社会学(青弓社)」です。(2020年5月出版)。「戦争など倒すべき敵がいるとき、人は連帯する」。コロナは世界的な戦争、という政治家、経済人は多くいます。

ある、障害者施設の代表者の言葉です。「今まではみんな一緒に嵐の中にいたような感覚ではないでしょうか。しかし、嵐が過ぎ去って、がれきの中にぽつんと一人、残されて、ふと我に返る。そのときに“どうしようか”と、落ち込んで鬱状態になる人もいるのでは」

今後、「生活再建ができる人々」と「取り残される人々」が生まれます。マスメディアもコロナを追わなくなれば、孤立を深め、自分が弱いのではと責め、わかってくれないと絶望的な気持ちになります。天災事変に立ち向かおうという「ハネムーン期」の後に来るのは「幻滅期」です。東日本大震災後、被災者が仮説住宅に入った後の自殺が増えたのも記憶にあるところです。

世界的な経済の停滞で、失業し、生活保護を受ける人もいるでしょう。リーマンよりひどい、ともいわれる社会情勢の中では「支援を受ける権利がある」と、本人も世の中も受け入れる必要があるでしょう。戦後、多くの人が生活保護を受ける時代には自殺率は現在よりも大幅に低い数字でした。

今後、相談は個別化されてくる、傾向があります。

今回は、人事や法律士業としてどのような支援ができるのか、ご紹介していきます。

<参考文献>

「新自殺論 自己イメージから自殺を読み解く社会学(青弓社)」(2020年5月出版)

「つながりからみた自殺予防(人文書院)」(2019年)

今までのヒント集①-⑫は

<https://www.rindowkokusai.com/hint>

に掲載されています。

☆☆☆

文責: 中條幸子(臨床心理士・公認心理師・社会保険労務士)

☆☆☆少しでも皆様の日々の対応にお役に立てれば幸いです。随時、情報を出していきます☆☆☆